

※ この試験問題は参考になるところを抜粋しています。

後

令和5年度

後期日程入学試験問題

## 総合問題 A

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（24 ページ）には、解答用紙（地域創生学部及び保健福祉学部 3 枚・生物資源科学部 3 枚）と下書き用紙（地域創生学部及び保健福祉学部 両面印刷 1 枚・生物資源科学部 両面印刷 1 枚と片面印刷 1 枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 受験する学部によって指定された箇所の問題に解答しなさい。

地域創生学部・保健福祉学部	3-13 ページ
生物資源科学部	15-24 ページ
- 4 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出し、受験する学部のすべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 5 解答はすべて、受験する学部が指定する解答用紙の所定欄に横書きで記入しなさい。間違っても他の学部用の解答用紙に記入しても、回収しません。
- 6 句読点は、一字と数えなさい。
- 7 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。



課題文①・②を読み、以下の問いに答えなさい。

問1 課題文①の下線部(ア)に「女子学生が少なく女子トイレが少なかったこと自体が、その空間の平等の水準を示すものでもあった」とあるが、これはどうということか。「教育の機会」というキーワードを用いて、100字以内であなたの考えを述べなさい。

問2 課題文①の下線部(イ)「普遍性と多様性のあいだの緊張関係」について、トイレを例に挙げながら、170字以内で具体的に説明しなさい。

問3 課題文①の下線部(ウ)「韓国政府が実施しているブラインド（目隠し）採用」について、地方出身者の採用に対する効用と限界を100字以内でまとめなさい。

問4 課題文②の下線部(エ)「そこにはどのような力が生まれるのでしょうか」という問いに対して筆者はどのように考えているか、100字以内でまとめなさい。

問5 これからの地域社会を形づくっていく上で、私たちはどのような点に留意する必要があると考えられるか。課題文①・②を踏まえつつ、これからあなたが大学で学ぼうとしていることと結びつけて、600字以内で考えを述べなさい。

## 課題文①

NASAのアポロ計画に参加した黒人女性たちを描いた映画『ドリーム』（アメリカ、2016年）には、主人公のキャサリン・ジョンソン（タラジ・P・ヘンソン）が雨の中、トイレのある建物までダッシュする場面がある。有色人種専用のトイレに行くためには、勤務している建物の外に出て、別の建物まで800メートルをわざわざ行かなければならなかった。1960年代初頭、当時のアメリカでは、女性用と男性用トイレを区分することに加えて、白人用と有色人種用のトイレを分離していたので、少なくとも四つのトイレが必要だった。映画の主人公が働く建物には四つのトイレすべてが設置されていなかったため、キャサリンは自分が利用できるトイレに行くために、別の建物まで走らなければならなかったのだ。

トイレは、社会の平等達成の水準を示す立派な尺度である。あらゆる個人的特徴や財産の有無、地位を問わず、たんに人間という生き物である以上、すべての人にかならず必要な空間であるからだ。トイレはすべての人が少なくとも一日に数回は行かなければならないところなので、その空間がどのように設計され、どう区別されているかを見れば、その社会が人々をどのように区分し、だれが主流でだれが排除されているのかが一目でわかる。1990年代のはじめ、私が大学生だったころを思い出してみると、学科の建物では女子トイレが一階おきに設置されていた。一方、男子トイレは各階に設置されていた。幸い、キャサリンのように別の建物まで走って行くほどではなかったが、階段を上り下りするたびに文句を言ったことは、いまでも鮮明に覚えている。当時は、学科に女子が少ないから仕方ないことだと思っていたが、いまになって振り返ると、(ア)女子学生が少なく女子トイレが少なかったこと自体が、その空間の平等の水準を示すものでもあった。

それでは、みんなが平等な社会のトイレとはどんなものなのだろうか。まず、実際にトイレを利用できるようにするためには、いくつかの条件が必要である。トイレが十分に近く、出入りしやすく、トイレの中で用を足して手を洗うことが可能で、この過程で羞恥心や不安、危険を感じることなく、安全かつ快適でなければならない。このような条件を満たし、すべての人がトイレを利用できるようにするためには、私たちには何種類のトイレが必要になるだろうか。

今日、私たちに身近な公衆トイレは男性用と女性用を区分している。トイレが性別によって分けられた歴史は相当昔にまでさかのぼるといわれ、その理由が何

だったかについては諸説があり、さまざまな議論がおこなわれている。研究者によっては、18世紀にフランスのパリで、上流階級が自分たちの品格を示すためにはじめて設置したとする説もあり、19世紀後半の産業革命期に職場に出た女性を、伝統的な性別役割観によって男性と空間的に分離したという説もある。また、セクハラや性暴力から女性を保護するための初期の法的措置として男女トイレが分離されたとみる説もある。

男女のトイレの次に、障害者のためのトイレが設置されはじめた。従来型のトイレは車いすや体の不自由な人には適していなかった。そのため、車いすが入るように空間を広くし、便座から立ち上がる際に体を支える手すりを設置した。車いすに座ったまま利用できるよう、洗面台や鏡の高さも調整した。開き戸のかわりに自動ドアを設置して、車いすが出入りしやすいようにした。障害者用トイレは、高齢者や幼児、妊婦のための空間としても使われるよう設置された。

ところが、導入初期に、多くの建物や施設で、障害者用トイレを男女共用でひとつだけ設置したことで問題が発生した。男女共用では利用者が不便や不安を感じるが多かったので、「障害者を社会的に無性の存在として認識している」と指摘があり、性別を区分した障害者用トイレの設置が求められるようになった。通常の女性用トイレと男性用トイレのほかに、女性障害者用トイレと男性障害者用トイレが設置された。性別と障害の条件に合わせるために、トイレは最低でも四つ必要になった。

しかし、問題はここで終わらない。男女で分離されたトイレを事実上、利用できない人がいるからである。たとえば、トランスジェンダー女性の場合、女性トイレでは男性だと思われ、女性利用者に怖がられて拒否される。一方、男子トイレでは、女性に近い外見のため、加害されるのではないかと本人が恐れることになる。トランスジェンダーやインターセックス、性別の典型像から遠い外見の人々には、性別の二元性にもとづいて作られたトイレは安全で快適と感じられない。

それでは、これからのトイレはどのように設計されるべきなのだろうか。すべてのトイレが男女に分離された状況は、日常生活の中でトランスジェンダーの人を苦しめている。そのため、性別区分のないトイレが必要になるのだろう。しかし近年、女性たちは男女分離型のトイレをより強く要求している。2016年に江南駅付近の建物にあった男女共用トイレで女性をねらった殺人事件が発生したことに加え、公衆トイレにカメラを設置して女性を盗撮するような事件も相次いでい

て、公衆トイレに対する不安が高まっているからだ。食い違っているように見える論争のなかで、みんなにとって平等なトイレを設けることは果たして可能なのだろうか。

人はだれもがトイレに行く。すべての人が平等なら、だれもが行くトイレを、真にだれでも行けるようにしなければならない。ところが、このきわめてシンプルな人間の「普遍性」は、実際に人々の「多様性」に出会うと一瞬で複雑になる。このとき私たちは「どうせ全員を満足させることは不可能だ」と結論づけることしかできないのだろうか。差別の存在を否定はしないが、完全な解決はどうせ不可能だと断念して現実を受け入れるべきなのか。平等はいったいどうすれば実現できるのだろうか。

トイレ論争の発端は、普遍的な人間をカテゴリ分けする社会的な相互作用にある。一部の人は、カテゴリをなくさなければならないと主張する。映画『ドリーム』でのトイレに付与されていた人種のカテゴリは消えるべき区別だった。白人用と有色人種用のトイレの分離は、白人が黒人を意図的に排除する、明らかな差別だった。より根本的には、人を人種で区別できるという観念そのものに問題があった。

人種主義 racism とは、人間は生物学的にさまざまな人種に区分されていて、異なる人種間には身体的、知的、道徳的な優劣の差があるという信念、あるいはそのような行動を示す言葉である。しかし、20世紀に入って、人種を決定する生物学的要素はなく、人種とは社会が恣意的に発明した社会的構築の産物に過ぎないことが明らかになった。当然、人種によって決まる身体および性格の特徴や道徳的人格などは存在せず、人種間の優劣の差もない。

性別はどうだろうか。女性と男性のあいだには身体的な差はあるが、女性か男性かという二分法的思考では、すべての人を説明することができない。性染色体、性ホルモン、性器などの特徴から、男性・女性どちらの性別にもカテゴリ分けされない、インターセックスの人がいる。また、出生時に身体的特徴から規定された性別と、主観的に認識する性別（ジェンダー・アイデンティティ）が一致しない、トランスジェンダーの人もある。かれらは二分法的な性別カテゴリの中で、どこにも完全には属せない。

人種のように、そもそも区分自体をなくすべきものがあるという認識に同意し、二分法的な性別カテゴリも不完全だということを認めるのなら、最初から何も区

分しないのはどうだろうか。差別が人をカテゴリ分けする行為からはじまるとすれば、その解決策として、すべての区分をなくすという代案を想像してみることができる。そのように、最初からすべてのカテゴリ分けをなくす方法で、平等は実現されるだろうか。人間は普遍的でありながら多様性を持つ。果たして、これら二つの属性は融合できるのだろうか。

(1)普遍性と多様性のあいだの緊張関係は、平等をめぐる数多くの争点の奥深くに位置している。代表的な例として、(2)韓国政府が実施しているブラインド（目隠し）採用は、特定の区分を意図的に隠す方法で普遍性を追求する。2017年の「公共機関ブラインド採用ガイドライン」で説明するように、エントリーシートの項目や面接などの採用プロセスにおいて、出身地、家族関係、学歴、外見などを明らかにしないようにしている。こうした情報のせいで〔評価者に〕「偏見を与え、不合理な差別をもたらす」結果を防ぐためのものである。

ブラインド採用で出身地や家族関係、学歴、外見などの情報を隠すことは、そのような区分によって人を評価することは正当ではないという発想からはじまった。実際に採用と関連するべき妥当な基準は「実力」でなければならず、そのためには、評価者の偏見に満ちた目を、文字通り見えないようにふさぐことである。「等しいものを等しく」あつかうという形式的平等は、すべての人に同じ基準を同等に適用することで、世の中が平等になることを期待する。

この方法は、平等の実現に対してどれほど効果があるだろうか。仮に、実力が優れているにもかかわらず、地方出身だという理由でたびたび採用を断られた人がいるとしよう。彼にとってブラインド採用は、非常に重要な平等実現の方法である。しかし、実際にこの方法で地方出身者の採用率はどのくらい高くなるのだろうか。ほんとうに地方出身ではない人と同じ採用率になるのか。もちろん例外的な場合もあるだろうが、多くの場合、現実的には難しい。なぜなら、平等実現の先行条件である同等な「実力」を備えるところから、地方出身であるという理由によって、困難に直面することになるからだ。

そのため、実質的平等の重要性が強調される。ブラインド採用は、評価者による偏りを減らすためのよい方法ではあるが、個人の偏見をなくしたからといって差別が解消されるわけではないという事実は否定できない。実質的に平等を実現しようとする、すべての人を同等にあつかうだけでは不十分である。不平等の継承を断ち切るための再分配政策も必要となるし、マイノリティに対する偏見や

スティグマ\*とも闘わなければならない、個人の多様性を考慮した制度を作るなど、他の措置を講ずる必要がある。

ふたたびトイレの争点に戻ってみよう。たとえば、トイレの看板を、だれでも使えるように「みんなのトイレ」に変えたらどうだろうか。男か女かの二分法で困っていた人々のトイレ利用〔の困難〕は少し改善されるだろうが、依然として問題は残る。看板を変えたからといって、障害者のアクセス権が自動的に向上するわけではないからだ。男性用の小便器が設置された既存の施設をみんなが一緒に利用すれば、相対的に女性用トイレの数が不足することになるし、性犯罪に対する女性の不安も解決されない。

それゆえ、普遍性と多様性の両方を満たすための代案を考える必要がある。多様性のない普遍性は虚像であり、たんなるごまかしに過ぎない。したがって、看板だけを変えた「みんなのトイレ」には限界がある。みんなにとって実質的に安全で安心できるトイレを作るためには、トイレを利用するさまざまな人を考慮しなければならない。そのようなトイレを新たに設計する必要があり、そのためには研究が必要だ。すべての多様性を「包含」する普遍性を見出さなければならない。

世界では、すでに実験がはじまっている。ヨーロッパやアメリカなどでは「オールジェンダー・レストルーム」、つまりすべてのジェンダーのためのトイレを設けて使用している。トランスジェンダーほかジェンダー規範に合致しない外見の人々、保護者と被保護者が異なる性別である場合など、多様な条件下での可能性を考慮し、だれもがトイレにアクセスできるようにした。たんに看板だけを変えたのではなかった。新しい設計が登場した。トイレの個室を、上下にすきまがある仕切りで区分するかわりに、すきまのない完全な個室として設計し、プライバシーを保護できるように配慮した。また、洗面台をトイレの中に設置し、個別に使用できるようにした。

2017年、私がデンマークのコペンハーゲンに行ったとき、すでにコペンハーゲン大学をはじめ多数の公共施設で「オールジェンダー・トイレ」が日常化していた。このような変化は韓国でも実現可能だろうか？ 女性、トランスジェンダー、障害者、高齢者、子どもなど、だれもが安全で快適にトイレを利用できる権利を保障するためのアイデアを出しあい、実行してほしいと願う。

トイレをめぐる差別の問題は、たんに施設の問題だけではない。「トイレに行く

時間がない」という声は、販売職の人、運転手、医療従事者、コールセンターのオペレーター、配達員など、あらゆる労働現場から聞かれる。「みんなのトイレ」は、観念の中の平等を現実のものにする、非常に具体的な人権プロジェクトである。「多様性をふくむ普遍性」をつくるための、このクリエイティブなプロジェクトに向けて、私たちは力を合わせて討論および研究をおこなっていく必要がある。

キム・ジヘ『差別はたいてい悪意のない人がする——見えない排除に気づくための10章』

(尹怡景訳、大月書店、2021年、第4刷)による。一部改変。

## 注

・ステイグマ……社会によって押しつけられる否定的な評価。

## 課題文②

現在ではデザイナーや専門家といった限られた人々によってデザインするのではなく、実際の利用者や利害関係者たちがプロジェクトに積極的にかかわっていく取り組みが世界中で活発になっています。閉じられた環境ではなく、積極的にひらいていくことを志向する、そんなデザインのあり方は、「コ・デザイン (Co-Design)」と呼ばれています。Coは、接頭語で、「ともに」や「協働して行う」という意味です。当初はCooperative Designとも呼ばれましたが、現在では縮めてCo-Design、またはハイフンを抜いてCoDesignという単語になっています。日本語で言えば、意味的には「協働のデザイン」、さらにかみ砕いた言葉では、「いっしょにデザインすること」となります。コ・デザインとは、グラフィックやファッションなどのように領域を示すものではなく、デザインにおけるアプローチ(対象に接近していくための一連の取り組み過程や考え方)の一つです。まず、一目で分かる事例を見てみましょう。写真はコペンハーゲンに立地する、ある小学校の校舎です〔図〕。

この小学校が立地している地域にはもともと公園が少ないという事情がありました。そこで再開発が行われたときには、小学校の敷地は塀が取り払われ、遊具や広場は地域の中で共有することを狙った計画が行われています。これらの環境



図 コペンハーゲンの小学校にある，らせん状の滑り台

のデザインはこの学校の子どもたちと建築事務所のコラボレーションによって行われました。中でも特徴的なのがこのらせん状の滑り台です。「校舎の上から一気に下まで降りたい！」という子どもたちの突拍子もない発想を建築家が上手にすくいあげ、制約を乗り越えたうえで実装しています。まるで学校帰りの子どもたちの歓声が聞こえてくるようなユニークなアイデアです。ここで重要なこととして、建築家は、形式的に利用者に意見を聞いたりするのではなくて、実際にその学びの場で過ごす人としての子どもの視点を尊重したうえで、大人にはないユニークな発想を取り入れるために子どもたちに協力してもらっていることを指摘できるでしょう。この滑り台には、設計する側が実際の利用者側と相互作用することによって、より高い創造へジャンプすること、つまり「いっしょにつくる」ことを通して、予定調和を超えてデザインすることの可能性が示されています。そしてそこだけで終わっていません。つくられたものは地域全体で共有され、住民たちの誇りにつながっています。自分たちの場所をともにつくっていくストーリーが地域の中で持続しているのです。このような、人々のかかわりあいの中で生みだされるダイナミズムこそが、コ・デザインの醍醐味と言えます。

コ・デザインでは、「実際の利用者」や「利害関係者たち」がデザインの過程に

積極的に加わっていきます。加わるとは、プロジェクトの中においてなんらかの役割を担うことです。それぞれの立場や属性を尊重したうえで、それぞれの人が役割を持ち協働することで、一人では決して生まれない相互作用が発生します。

(エ) そこにはどのような力が生まれるのでしょうか。

何かをデザインする場合、その対象を深く理解するために、実際の現場をよく観察してインプットの源泉にすること、発見したものごとを一步踏み込んで洞察することの大切さはよく語られます。セオリーとして今では共通認識になっていると言ってもいいぐらいです。しかしながら、どこまで徹底的に調べたとしても、調査する範囲の制約はあるもので、長期的に利用していく当事者の気持ちや、刻々と変化する文脈を探りあてることが難しいものです。そこでつかい手側にいた人々がチームの中に加わり、(部分的にでも) 作り手になることで、見落とされやすい視点を洗い出すことに貢献することができます。専門家からでも見えていないことは、実はたくさんあります。デザインするための要件を外部から調べるだけでなく、「つかう人が自分でプロトタイプ\*をつくってみる」ことで、内部からしか見えない現場の文脈が思いがけないかたちで見えてきたりするものです。成果物を構想する際に、多角的な視点を取り入れていく仕組みをつくることは、たいへん重要です。

デザインのプロジェクトを進めていく中では、さまざまな専門分野を持つ人々が連携する必要が生まれます。しかし領域が違っていると、自分の責任を持つ範囲が決まってしまうがちです。バックグラウンドが違っていると、職能的な美意識やつかっている言葉の意味も少しずつ異なるのが普通です。それぞれの専門家が相互の仕事に立ち入らず、つなぐべきところをつながなかった場合、誰も得しない奇怪な成果物ができることになります。そんな場に、実際につかっていく立場の人がいることは、本来の目的に立ち返り、生まれがちな壁を越えていくことに貢献するでしょう。本物の利用者だからこそ、しばしば縦割りになりがちな既存の組織を壊し、領域の壁やしがらみを取り払い、異分野を結びつけて共通の目的を達成するための「触媒」になることができます。

実際の利用者とは、ただつかうだけの人ではありません。実際に「コトに当たる人」ととらえれば、「当事者」ととらえられます。当事者たちはプロジェクトに加わり、専門家とかかわりあう経験を通してその場のデザインの問題を自分に近づけていきます。お客様の立場から作り手に回ることによって、他人事で

はない責任感が生みだされます。そして「自分たちで自分の周囲を変えていくことができた」ことは、その人の人生を力づけるはずです。そんな経験を得ることで、開発のフェーズが終わった後でも、自分たちで状況の変化に対応しつつより良く持続させていく可能性を高めます。(中略)

こうして見てみると、特別な「スキル」を持たない人々であっても、なんらかのかたちでデザインのプロジェクトに貢献することができるような「チカラ」——言い換えれば「専門性」——はあちこちに埋もれていることに気がつかないでしょうか。人間は何かしらの専門性を持つものです。こどもは遊びのスペシャリストですし、主婦は家事のスペシャリストです。思うように身体を動かさず、もどかしさや悔しさを感じる気持ちは、そのことに耐えている人でなければ分かりません。日々向き合っているからこそ見えていることや感じていることは必ずあるものです。

その一つひとつの専門性は小さなものかもしれませんが、うまく組み合わせることで自分だけのチカラを発揮できるはずです。そんな場をつくる試みがあるのならば、加わることをためらう必要はありません。

上平崇仁『コ・デザイン——デザインすることをみんなの手に』

(NTT 出版株式会社, 2020 年) による。一部改変。

## 注

・プロトタイプ……試作品。



